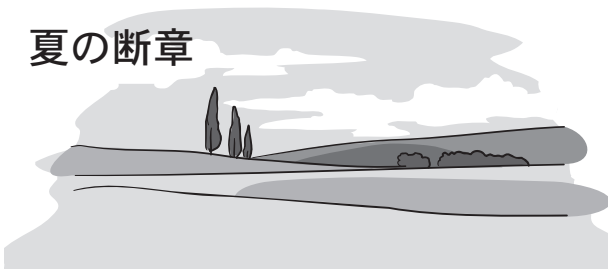


## 夏の断章



寿都医師会  
黒松内町国民健康保険病院

秀毛 寛己

「緑陰随想」という言葉に、夏休みの思い出がよみがえる。

小学校の高学年、美術の先生に頼まれて、神戸・布引の徳光院「多宝塔」の写生をした。都会の喧騒を離れ、楠の木の香りが漂う涼しい清澄な林の静寂の中で、制限時間を気にすることなく描いた。描画に疲れると、父と弟が捕えた美しいミンミンゼミに見入ったり、母の弁当を食べ、地面に寝転がって休憩した。

学生時代、始発で須磨海浜公園に出掛け、日の出前から防波堤で釣りをしたり、松林の木陰で午睡したり、一日中を海で過ごした。いつもクーラーボックス一杯にキスやタナゴ、キュウセンペラ、小鯛、小アジなどの釣果を携え、日没のころ家路に着いた。魚屋さんに行く必要がないと母が笑った。漁師になってもいいなと考えたくらいだ。

図画は、頼まれるだけあって一応得意ではあったが、絵描きになろうとは一度も思ったことはない。幼稚園時代、園長が「この子の絵は天才的だ」と父兄会で評したと小学生になって母に聞かされたことがある。小学校時代、副賞に画具をくれる大会が多く、自分で絵具等買った記憶がない。県展や神戸市教育委員会の展覧会などでの特選受賞は全校生徒の前でただ一人特別表彰されたが、数度目で取りやめになった。目立ちすぎとの校長判断だった。最高の知事賞も教室で父兄への連絡手紙のように手渡され、友人たちがそれでふざけて表彰式ごっこをして遊んでいた。美術の先生は神戸市の重鎮であったが、父兄懇親会で「神戸市で一番うまいといってもよい。ただし、壁を破らないと大成しない」と言ったらしい。表彰状と副賞欲しさで描いてただけで、そんなことはどうでもよかった。

神戸王子動物園で絵を描く会が毎年開かれた。不思議に、このローカルなコンテストでの受賞は少なかった。いつも遊んでしまい、ちゃんと描かなかつたようだ。小6の時、意気込んで絵画と粘土部門でダブル金賞を狙った。誰も描く対象としない動物、ワニを選んだ。思惑通り付近に子どもはいない。キリンやゾウのところは画板の子どもや同伴の父兄でいつものごとく賑わっている。落ち着いてガラス越しのワニのうろこを描きはじめた。しばらくすると、その単調なはずのうろこの質感や光沢を描くの

に熱中して、我を忘れてのめりこんでしまった。ふと気付くと、背後に大勢の大人の感嘆しているような話し声を感じた。8ミリで撮影している人もいる。無視して画板に集中しようとしたが、審査の先生風の人にマイクをもって話しかけられ、絵筆を休め中断せざるを得なくなった。優等生的な受け答えをしているうちに、金賞なんか貰ったも同然と集中力が途切れてしまった。その後気分転換にほんの少し遊びに行ったつもりが、戻ると提出締め切り30分前となっていた。しまった！ ワニのうろこに熱中してほかはほとんど何も描けてない上に、粘土作品もまだ造ってない。購入した粘土2つをこね、恐竜みたいなオオトカゲを15分ほどで作成、ついで大慌てでワニのバックを塗り、竜頭蛇尾な作品を走ってぎりぎり提出した。粘土は当日審査となっていたので列の最後尾に滑り込んだ。厳しそうな先生が二人で、児童の作品を審査している。本人たちの前で歯に衣着せず声高に改善点を指摘しているようだ。自分の番が来て「なんだこれは？ ヤル気あるのか」と怒られると思い、身が縮む思いでできそこないの作品を差し出した。小言を頂戴する前にさっさと逃げようと思ったが、その二人はうーんと黙ってしばらく作品を眺め、写真に撮り、「きみは怪獣が好きか？」と聞いた。はいと戸惑いながら答える間もなく金賞のレッテルを貼ってくれた。爬虫類独特の律動感の表現が素晴らしいとか、聴くのも恥ずかしくて、逃げるように立ち去った。実は、粘土は絵と違い苦手だった。全精力を傾けた？ワニの方は、結果何の賞も取れずじまいだった。

考えてみると、満足できた作品はすべて選外に終わっている。不本意な作品、書き損じた絵が意外に大きな賞を貰っている。時には容易に、ある時全然通過できないへそ曲がりな美術の壁の一部分は、身を持って幼少時から自覚していた。だから工夫が素直に釣果に反映する漁師になりたいと思っても、画家になりたいとはまったく思わなかった。

母は後年よく言った。「夏休みに描いた塔の絵、返してほしいね」。

夏の木陰のスナップ写真のような記憶である。